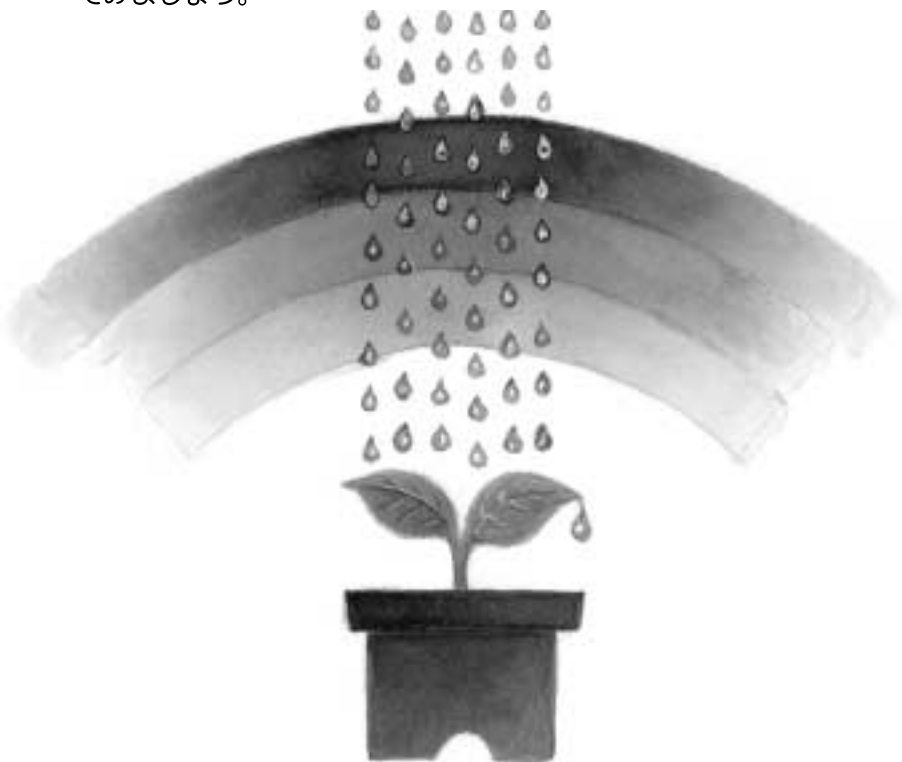




# 「育てる心」に気づく

人に注意されたり叱られたりするの、誰しも嫌なことです。なかでも、身近な人から叱られたりすると、ショックも大きく、落ち込んだり、相手を非難したりしがちです。

今回は、身近な人から叱られたときの受けとめ方について考えてみましょう。



# 部活動の練習で

高校一年生の中島淳くんは、サッカー部に所属しよぞくしています。

子どものころからサッカーが大好きで、中学時代にはサッカー部のキャプテンを務つとめました。高校でも迷わずサッカー部に入り、その年の秋にはレギュラーにも選ばれました。放課後になると、元気に部活動で汗を流し、くたくたになつて帰宅するという毎日を送っています。

二月のある寒い日のことで、部活動の練習中に雨が降り出しました。グラウンドはだんだんぬかるんできます。こんな状態では練習になりません。少しかぜ気味きみの淳くんは、早く練習が終わらないかと思いまし



た。他の一年生部員もみんなそう思っているに違いありません。

しかし、二年生の先輩はなかなか練習を切り上げてくれません。だれかが「早く終わらないかな……」と小声でつぶやくのが聞こえました。みんな練習に力が入っていないのがわかりました。

ようやく練習が終わると、二年生のキャプテン・高山英二くんは、一年生全員をグラウンドに残しました。

「今日の練習態度はなんだ！」  
「……」

「ダラダラとやっていて、練習になるのか。再来月には新入生が入ってくるんだぞ！ 特に今日の中島はなんだ！ あんな練習をするやつに、サッカーをする資格なんかない！」

高山キャプテンは、淳くんに

とつてあこがれの存在でした。ゆくゆくは自分も、キャプテンのようになってサッカー部を引っ張っていきたいという目標を持っていました。そのキャプテンから、こんないきつい調子で、しかも名指しで叱られたのは初めてでした。

雨足がかなり強くなってきました。しかし淳くんたちは、キャプテンの話が終わっても、反省を促され、しばらくグラウンドに立たされたままでした。



# 先輩の態度に傷つく

次の日、淳くんは、昨日の練習で雨にぬれたせいとか、体がだるくて熱っぽい感じですよ。学校を休もうかとも思ったのですが、がんばって登校しました。

午後の授業が始まる前のことです。淳くんが次の授業の教室へ移動しようと廊下ろうかに出ると、向こうからキャプテンがやってくるのが目に留とまりました。キャプテンは友だちと何かを話しながら近づいてきます。

淳くんは、昨日のことがあり、キャプテンと顔を合わせたくありませんでしたが、思い切ったもののようにあいさつをしました。

「チワッス！」

キャプテンは、ちらつと淳くんのほうを見て、うなずいたように見えました。しかし、淳くんには何の返答も聞こえませんでした。

キャプテンは、一年生があいさつをする、必ず返答してくれる先輩として人気がありました。それだけに今日のようなキャプテンの態度はショックでした。

「キャプテンは、僕ぼくのことが嫌きらいなんだ……」

淳くんはそう思うと、気持ちしんが沈しずんでいくのが自分でもわかりました。

「昨日は、なぜ気味で、確かに練習に力が入っていなかった。だけど、僕なんかよりダラダラと練習していたやつだったのに。あんなふうにきつく言わなくてもいいじゃないか」

淳くんの心の中は、怒りとも落胆とも  
わからない感情が渦巻いていました。

\*

体がだるくて、その日から二日間、練習を休んだ淳くんは、三日目には元気になるりましたが、練習に行く気がしませ



ん。キャプテンと顔を合わせることが、  
どうにも気まずいのです。

今まで、部活のために、毎日、暗くなつてからしか帰宅しなかつた淳くんが、ここ数日は明るいうちに帰つてきます。母親の晶子さん(42歳)は心配になりました。その夜、帰宅した父親の賢治さん(47歳)は、晶子さんから、最近の淳くんのように聞きました。

賢治さんが淳くんの部屋に行つてみると、ドアのすき間から明かりがもれていました。

「淳、まだ起きてるかい。少しいいか？」

「うん……」

賢治さんは、最近の淳くんのことを晶子さんが心配していると伝えながら、学

校で何かあったのかを聞いてみました。

キャブテンとのことは、もう考えたくないと思っていた淳くんは、しばらく口をつぐんでいました。しかし、だれかに聞いてもらいたい気持ちもあつて、ぼつりぼつりと話し出しました。

じつと聞いていた賢治さんは、淳くんが話し終わると言いました。

「なるほど、あこがれている先輩に叱られるのはつらいよな……。淳の話聞いていて、お父さんも昔のことを思い出したよ」

「へえー、お父さんにもそんなことがあつたの？」

賢治さんは、淳くんに請こわれるままに、若いころの会社でのできごとを話し始めました。

「君には仕事  
が分かっていない」

当時、二十七歳の賢治さんは、東京のある玩具がんぐメーカーの本社営業部員として、東北地方を担当していました。あるとき、一泊二日で青森市、八はちのへ戸市、盛岡市など東北北部の主な販売店を回つて、新商品の説明と販売の仕方について打ち合わせをする出張に出かけました。

新商品の説明会は、その商品の売り上げを左右するほど大事なもので、賢治さんは初めてその大役を任まかされたのでした。

限られた時間の中、早朝から夜まで、回れるだけの販売店に顔を出し、賢治さ



んは精いっぱい説明会を行いました。説明会には、東北エリアを管轄する東北支社の若手社員が応援に駆けつけました。新商品はどの販売店でも好評で、みんな販売に意欲を示してくれました。

その日、最終列車の直前まで販売店を回った賢治さんは、翌朝本社で行われる営業会議に出席するため、事前に連絡を

取っていた東北支社に顔を出さずに、東京行きの列車に飛び乗ったのでした。

二日後、出張の成果は数字となっていました。東北支社でとりまとめた新商品の発注数は、予想を大きく上回っていました。賢治さんは、出張のお礼と報告のつもりで、意気揚々と東北支社の佐藤良治営業部長に電話を入れました。

実は、佐藤部長は賢治さんが入社したときの上司でした。人柄もよく、実力もあり、賢治さんが尊敬する上司でした。今回の出張についても、事前に電話を入れたところ、各地の販売店の特色や責任者のようすなどを教えてくれたのも佐藤部長でした。

ところが、ひととおりの報告が終わると、佐藤部長からこんな言葉が返ってきた

ました。

「ところで中島くん。君には、この仕事  
がどういふものか分かっていないようだ  
ね。今回のような出張をするのなら、も  
う東北には来ないでくれ！」

思いがけない佐藤部長の話に、返す言  
葉を失った賢治さんをよそに、電話はそ  
のまま切れてしまいました。

佐藤部長は、賢治さんが支社に立ち寄  
らなかつたことを叱責しっせきしていました。し  
かし、そんなことはよくあることでした  
し、本社の営業部でも、そういうことが  
問題になったことはありませんでした。  
本社の営業部にいた佐藤部長ならば、百  
も承知のことでした。翌日も、翌々日  
も、賢治さんには佐藤部長が言ったこと  
の意味が分かりませんでした。

「気づいてほしい  
と祈る心」

「その部長さん、お父さんのことが嫌い  
だったの？」

「お父さんも、そうかなと不安になった  
けれど、四、五日して気づいたんだ」

「何に気づいたの？」

「うん。佐藤部長がお父さんの直接の上  
司だったころ、『仕事がうまくいったとき  
こそ、周りの人たちの努力を評価してや  
ることが大事だ』と、よく言っていたこ  
とを思い出したんだ」

「それ、どういうこと？」

「当時のお父さんは、忙しいのをいいこ





とに、人のことなど考えず、自分一人ががんばったからうまくいったと思っただんだよ。でも、新商品が好評で、発注の数が多かったのは、商品を開発した人たちのおかげだし、支社の人たちが日頃

から販売店の人たちと良い関係をつくってくれていたおかげだったんだ」

「でも、お父さんだって、がんばったじゃないか」

「たしかにお父さんもがんばったよ。けれど大事なことは、かかわってくれた一人ひとりの努力を認めてやることなんだ。特に本社の担当者はね。佐藤部長は、お父さんに、そういう周りの人を思いやる人間になってほしい、そのことに自分から気づいてほしかったんだね」

「ふーん。自分から気づく、か……」

「そう。気持ちを言葉にして説明することは大切なことだ。けれども、厳しく叱って、「気づいてほしい」と祈ることが必要なときもあるんだよ」

「お父さんは部長さんに謝ったの？」

「ああ。気づいたことを手紙にして送ったら、すぐに電話がかかってきてね。

『よく気づいてくれた』と、とても喜んでくれたよ。佐藤部長は、今でもお父さんの恩人の一人なんだ」

「ふーん。サッカーもチーム・プレーだから、部員がいつもいい関係でないと、すぐプレーに影響が出るんだ。中学でキャプテンをやったときも、そういうことがあったよ」

「淳は、中学でキャプテンを経験しているから、淳を叱ったキャプテンの気持ち分かるんじゃないか」

「そんなこと、考えてもみなかったよ」

「そうだな。身近な人から厳しく叱られると、気持ちが悪く感じたり、腹が立つたりで、相手の思いが見えなくなってしまう」



「もうからね」

淳くんは、賢治さんと「おやすみ」を交わした後、キャプテンとのことを思い返していました。ベッドにもぐりこんでも、なかなか寝つけませんでした。

# 山本周五郎作「蜜柑」

翌日、学校での一時間目の授業は、淳くんの好きな国語でした。配られたプリントには、山本周五郎の小説「蜜柑」のあらすじが書かれてありました。先生に言われて黙読するうち、淳くんはその内容に惹かれていきました。



話は、江戸中期、紀州徳川家における安藤直次と大高源四郎の物語です。

\*

安藤直次は、徳川家康から特に選ばれて、家康の第十子、頼宣の家老となり、紀伊五十万石の基礎を固めた人物である。頼宣の信頼もことのほか厚かった。その直次もついに、老齢のため危篤状態に陥ってしまった。

徳川頼宣の側近に仕える若侍、大高源四郎は、少年のころから頼宣に仕えてきた。主君のため、お家のため、という生一本な性質のために、たびたび上役や同輩と争い、失敗をくりかえしてきた。そのため、しばしば直次にどなりつけられていた。他の者はそれほどでもないのに、直次は、源四郎にだけは辛辣だった。

た。源四郎は、直次から嫌われているとも憎まれていても思っていた。が、直次が傑物であるだけに、自分一人が疎まれていると思うとさびしかつた。

それゆえ、危篤状態の直次の病床に呼ばれた源四郎はうれしかつた。ところが、この期に及んでまでも、直次から厳しい叱責を受けた。

「そのほうは、まだ、まことの御奉公というものを知らぬ。そのような未熟なことでは一人前のお役には立たんぞ！」

一瞬のうちに蒼白になつた源四郎は、無念さのうちふるえた。

「直次様は自分を憎んでいるのだ。自分の気持ちは、結局、直次様にはわかつてもらえないのだ……」

源四郎は、悔し涙を流しながら、直次

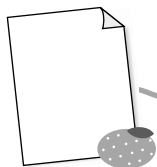
の病床を退いた。

それから数日後、直次は八十二歳で亡くなつた。

その後、源四郎は、家中の者といさかいを起こしたことが原因で、主君、頼宣から厳しいおとがめを受けた。そして、頼宣の側近という重要な役職から、蜜柑畑の宰領（監督役）をするという閑職へと左遷させられてしまった。

黙々と蜜柑畑で働き続ける源四郎。そのまま二か月あまりが経過した。

ある日、ふいに頼宣が蜜柑畑に現れた。源四郎は頼宣に、江戸への使者に立つよう命じられた。幕府が、紀州家に謀反の疑いをかけてきたので、その申し開きをするための使者である。申し開きのしようによつては、紀州家がおとりつぶ



しになってしまふかもしれないという、大切なお役目であった。

そんなお家の一大事を、主君から直接任された源四郎は、感激に胸がふるえた。そしてこの時、頼宣は、最後に一言、源四郎に言い置いた。

「安藤直次の墓に参つてゆけ。直次は、誰よりもそちに望みをかけていた。誰よりもそちの身を案じていたぞ」

源四郎は、はつと眼を見開きながら、夢からさめたように頼宣を見上げていた。

「そうだったのか。直次様は、自分のような者にそんなにも期待していてくださったのか……」

それから数日後、紀州から江戸へ向かう途中、三河にある安藤直次の墓前に、旅姿の若侍の姿があった。危篤の病床で「今年の蜜柑が食べたかった」と言っていた直次の墓に蜜柑を供えて、源四郎は、墓前に額ひかずき、むせび泣いた。そして、このたびのお役目、まことの御奉公として、きつと見事に果たします、と直次の墓に誓ったのだった。

# 厳しさの奥にあるもの

淳くんは、「蜜柑」を読みながら、キャプテンのきつい言葉が、頭の中に何度も浮かんできました。そのうち、以前、キャプテンから聞いた言葉が、いくつか思い出されてきました。

「試合に勝ったか負けたかというのは結果なんだ。結果よりも過程を大切にして、毎日の練習を大切にしよう」

「サッカーは一人でやっているんじゃない。部員どうしの信頼がなければ、力があってもその半分しか出せない」

「サッカー部員は勉強もしつかりやつて、人を思いやれる人間になろう」

そんな言葉を思い返しながら、淳くん

は、「キャプテンが僕のことを厳しく叱ったのは、僕のことを嫌いなんじゃないで、何かに気づいてほしかったからじゃないだろうか」と考えるようになっていました。

淳くんは体の奥から力が湧いてくる気持ちでした。

\*

その日の夕方のグラウンドには、大声を出して元気にサッカーの練習に励む淳くんの姿がありました。

淳くんは、キャプテンとあいさつを交わしただけで、話をしていません。でも淳くんは、それでいいと思っていました。この間のことで、いつかキャプテンと話せる日がくることを信じていたのです。

# 「育てる心」が見えてくる

私たちの周りには、親や学校の先生、部活動の先輩や職場の上司など、私たちを育ててくれる人がいます。

そういう人から叱られると、気持ちが



落ち込んだり、感情的になって相手を非難する気持ちになりがちです。そんなときは、自分の心の持ち方を振り返ってみる時間が大切でしょう。

気持ちが落ち込んだり、相手を恨んだりしているときは、相手はこういうつもりなのだと自分勝手に判断してしまつて、相手がどういう思いで叱つたのかに気づく心の余裕を失っていることが多いものです。

しかし、角度を変えて眺め直してみると、叱ってくれた人が、自分を育てようとしてくれていた心が少しづつ見えるようになってきます。ときにそれは、感謝しても感謝しきれないほど大きな恩恵であることに気づくこともあるのではないのでしょうか。